(第3種郵便物認可)

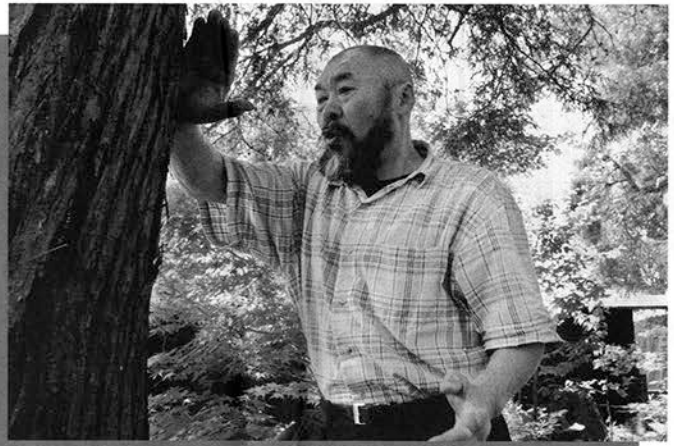
生きがい発見

第3部 変える ②

世界を見つめ修行

空手家 岸信行さん 61 (新庄市)

東北ひとサイト



撮影・中島千尋

新庄市の中心部に道場を構え、約15年になる。丁寧な指導で、門下生の信頼は厚い。「鍛えたい」という一心で40年以上、空手に没頭してきた。言葉の端々に、相手を圧倒する迫力がある。

20歳代の頃から、海外で空手を指導していました。米国から帰国したのが45歳の頃です。「空手はどこでも続けられる」と思い、故郷の新庄で道場を開きました。現在は、10人余りを教えています。「強くなりたい」「健康維持のため」など、始める理由はさまざまです。それぞれの門下生に合わせ、指導を工夫しています。

自分自身の修行は、寝ている間も含め、24時間ずっと続けているつもりです。道場裏の木を相手に拳や蹴りを鍛え、新庄に隣接する真室川町の山中にある「山の道場」にこもり、大自然の気を感じています。戦う時には、必ず空手着を着ているわけではありません。だから、自分の修行は常に普段着で行います。その方が、日々の体の変化をうまく感じられるようです。

道場の方針として門下生たちを大会に出場させていないので、「純粋に空手を学びたい」という人だけが通ってきます。基本の形を、ゆっくり覚えてもらった後は、その人に合った空手を指導します。米国で教えた弟子が道場を訪ねてくることもあり、よい刺激になっています。

空手を世界に広めるため、指導員として、23歳で台湾、25歳で米国に渡った。治安が悪化していたニューヨークでの暮らしを通じ、勝つための空手を極めたいという思いを強くした。

台湾で指導していた頃は、相手の体に当てない空手が主流でした。それでも私の指導が厳しすぎたのか、2か月で指導員を辞めさせられたこともありました。別の道場では、何百人もの生徒が集まり、真剣勝負の空手を指導しました。空手そのものだけでなく、日本の精神を伝え、現地で浸透できたと思います。

19歳で家出 内弟子に

小学生の頃、自宅近くで若者らが空手の合宿に打ち込む様子を見て、空手に興味を持った。「自分をとことん鍛えたい」とあこがれたが、身近な道場がなく、なかなか夢はかなわなかった。

高校を卒業し、19歳の時に家出をして、東京の極真会館に入門した。空手の達人として知られ、1994年に亡くなった大山倍達館長に実力を買われ、内弟子になった。当時、「内弟子になれるのは、数百人に1人だけ」と言われており、米国や台湾などで空手の普及に尽力した。約20年前に独立し、ニューヨークに岸空手道場を設立した。その後、母親が体調を崩したことなどから、帰国を決意。日本に一緒に来て、支えてくれた妻のパトリシアさん(58)には「頭が上がらない」という。

＊

きし・のぶゆき　48年、新庄市生まれ。妻、娘と3人暮らし。

米国では、いつ殺されるかわからないほどの地域で教えていました。虚勢を張るためドラッグや酒におぼれる人も、たくさん指導しました。私は背が低いので、甘く見られることも多かったです。そんな時、おびえてしまうと、「日本の空手は弱い」と思われるので、絶対に引き下がりませんでした。

弟子たちと行ったバーで「本当に強いのか」と挑発されたので、ビール瓶を拳で割って見せました。普通はビール瓶が飛び、壁に当たって割れるのですが、私は鍛えているので、瓶が飛ばずにその場で粉々になるんですよ。強さを見せると、弟子たちは「Sensei Kishi」と呼んで、信頼してくれました。

2001年の米同時テロの後、心に傷を負った「ニューヨーク道場の生徒から「空手で励ましてほしい」と連絡があった。空手で結ばれた絆の深さを、改めて実感した。

ニューヨーク道場は、崩れ落ちた世界貿易センタービルのすぐそばでした。母が入院中だったこともあり、テロの約3か月後にようやく現地入りできました。私には空手の指導しかできませんが、ともに汗を流すことで、傷ついた彼らの心を支えようと思っていました。

今も世界各地で修行を続ける弟子から指導を頼まれるので、いつでも道場の門戸を開いています。新庄から世界を見つめ、修行を積んでいるわけです。まだまだ静かな暮らしはできそうにありません。

(聞き手・中島千尋)

約20年前、米国のニューヨーク道場で指導する岸さん(右)＝岸さん提供

引き継がれる精神

岸さんから受け継いだ技や精神を広めたいと考える門下生も少なくない。

盛岡市夕顔瀬町、会社員遠藤領さん(52)は、40歳の頃から約5年間指導を受けた。以前に空手の経験があり、習い始めて3年ほどすると、熱中するようになった。岸さんに「まず相手に打たせろ」と教わったことで、「攻撃を体で受け、自分が強くなれると実感した。臆病な部分を払拭できた」という。将来は道場を開くことが夢だ。

大阪府在住のフリーライターの不動武さん(45)は、岸さんの生き方を「空手仙人 岸信行　枕にキノコが生えるまで泣け!　不敗の人生術」(東邦出版)という本にした。岸さんは初め書籍化を断ったが、「空手をやらない読者にも生きる力を与えられる」と説得。空手を通じた教育論や自然の中で修行する意義などを5章にまとめた。不動さんは「岸さんの教えを伝え、大不況で増加する自殺者を減らしたい」と話しており、続編の構想もあるという。

ひとクリック

ジュンサイ祭り開催

ジュンサイの生産量日本一を誇る秋田県三種町で、ジュンサイを使った料理を堪能できる「森岳温泉日本一じゅんさい旬まつり」が31日まで開かれている。ジュンサイはスイレン科の多年草で、7月が収穫のピーク。開催期間中、町内のホテルや道の駅など計14か所で、取れたてのジュンサイを入れた鍋や軍艦巻き、フランス料理といった独自メニューが楽しめる。阿部農園では沼に浮かべた小舟に乗り、摘み取り体験ができる。問い合わせは、町観光協会(0185・83・2112)へ。

東北の